

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和6(2024)年  
2月号

通巻642号  
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和6年2月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)45-1192  
★印刷 大倭印刷  
★定価 1部 300円  
年間購読料3,500円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



山尾三省(左の大写真)の書斎、「愚角庵」内の祭壇 屋久島 手塚賢至さん撮影(文・4頁)

転載 1997年春、野草社発行の雑誌『自然生活』第11集より

## 南の光のなかで (連載その11)

“矢追日聖さん、ありがとう”号 屋久島 山尾三省

『南の光のなかで』の連載は単行本になっ  
ています(新泉社発売)。その帯に  
「屋久島の森に住み、耕し、詩い、祈る  
日々を生きた詩人が、屋久島の森に還つ  
た。詩人の遺した言葉は、時とともに輝  
きを増していく」とあり、2001年8  
月28日帰幽。(編集部)

オリオン星

全天で  
いちばん賑やかな  
いちばんうれしい星は オリオン星であ  
る

春の宵に  
まるでわたくしひとりのために  
賑やかに南中している オリオン星を眺  
めていると

宇宙百五十億年の孤独は癒され  
地球四十六億年の孤独も癒されて  
ひとりの静かな念佛者として

南無オリオン星如来・不可思議光佛  
南無阿弥陀佛・銀河系如来 と  
うれしくうれしく お念佛を唱えること  
ができる

オリオン星と

銀河系のすべての星々が  
明らかな阿弥陀如来であり 神々である

と了解されたからには  
もう 信に苦しむこともない

この世のことを なるべく正しく果たし  
この世に人たちと なるべく親しく交わり  
この世のことを正しく歌って ここを過ぎてゆく  
ほかはない

春の宵

この生死でいちばん賑やかな うれしい星は  
わがオリオン星 ほし わたくしの南無不可思議光佛で  
ある

一

この二月九日に、大倭紫陽花邑おおむらさきばなの法主さんこと  
矢追日聖師が帰幽された。

かねてより顕幽一如と言われ、霊界(身体を離れた世界)と楽しく遊ばれてきた方であるから、その知らせを受けても無念や悲しみの感情はさほどでなかったが、その日の夜に眠りに就こうとした時に、私の身にもある異常が起きた。

十一時過ぎに眠ろうとして床に就いた時に、突然死の恐怖が、つかみかかるように襲ってきたのである。

私が死の恐怖という発作に最初に襲われたのは高校三年の時で、その時はその発作のあまりの強さに日常生活ができなくなり、一年間高校を休学して、精神科や神経科の病院を巡った末に、静岡市にある、森田療法というものを採用した鈴木治進先生という方の病院にお世話になって、二ヶ月ほど作業療法をつづけている内に、何とか日常生活に戻ることができるようになった。

その療法の中心は、恐怖や不安をかかえながら

あえてそれを取り除こうとせず、目前の作業にとにかく一所懸命に手を出してゆく、という言うは易く行くと難しいものである。

その最初の発作以来、死の恐怖と不安は常に私の中にあり、ありながら目前のなすべきことをなす生き方をそれ以来四十年もつづけてきたわけであるから、死の恐怖、そして不安は、私にとつてはいわば空気のようにいつでもどこにでも遍在するものであると云ってよい。

だから、法主さんが帰幽された日の夜にたまたまそれがやってきた時には、きたたと内心でつぶやきながら、これまでの何十年の間に身につけてきたそれへの対処法を使って、当然のことながらすみやかに去ってもらうべくそれに対処したのである。ところが、普段のようにそれは消えてゆかぬばかりか、なんだかこれまでにない特別の角度のような時空から、ひと息に刃物のような鋭さでぐいと私の中へ入り込んできた。

あつと思つた時にはすでに遅くて、私はまったく久し振りに(十年振りくらいであらうか)、発作と呼ぶのが一番びったりする、その死の恐怖にがしつと掴まれてしまった。

布団をはねのけてがばと起き上り、大きく深呼吸をしてから台所へ水を飲みに行ったが、そういう形の体での反射的な対処の仕方を迫られたのは、久し振りどころか屋久島に移り住んでからは初めてのことである。高校のころ最初に発作を起こした時は、一晩に何十回もそういうことがあって眠るどころではなかったのだが、二月九日の夜の場合も、これは今夜は眠るところじゃないな、と、四十年も昔の夜々を思い起こしたほどであった。

台所で水を飲んで、少し落ちついて寝室に引き返したが体を横たえる気持にならない。そのまま

足だけ布団に入れて綿入れをかぶってじつとしてると、その日に逝かれた法主さんのことがおのずから思われてきた。

いきなりこんなものが襲ってきたのは、法主さんの肉体が機能を失って、その靈魂が世界に帰入してゆくに際して発せられた衝撃波ではなかったのか、という考えがまず最初にやってきた。けれども、私は法主さんとそれほど近しく親しい間柄ではないので、その衝撃があったとしてもそれが私にまで伝わってくるというのは、思い過ぎのようにも感じられた。

法主さんの帰幽が私にまで衝撃波として伝わってきたのだとすれば、それはその間にある石垣雅設さんという、法主さんと最も近い関係にあった人の受けた衝撃波をおして、それが私にも伝わってきたのかもしれない。石垣さんがそういう種類の衝撃を受けたかどうかは、お会いして聞かねば分からないことであるが、どうもその方が私に起こった現実を理解するには当てはまっているような気がする。

突然の発作が、法主さんに直接淵源するのか、石垣さんを通してやってきたのか、それともそれらとは無関係にたまたま私自身の内発的な原因によってやってきたのかを考えてみると、残念ながら私自身の内発的な原因という根拠は最もリアリティに乏しく、やはりそれは法主さんか石垣さんのどちらからかやってきたのだと思うほかはなかった。

精神的な世界にせよ、物質的な世界にせよ、ひとつの世界に安定を与えていた淵源が崩れると、世界全体もそれと同時に崩れる。直接の原因が石垣さんにあるにせよ法主さんにあるにせよ、奈良の大倭紫陽花邑おおむらさきばなというひとつの世界からの崩壊の余波が私にまで伝えられてきたことは確かだ、

それだけ法主さんという存在は深く、大きかったことになる。

改めてその方向へ向けて合掌し、お念仏も唱え、  
「心安うになあ——」と言われていた法主さんの姿を思いおこしていると、いつのまにか、襲ってきていたものは鋭さを失い、私は少しずつ平常に戻ることができた。

## 二

最近何年かの法主さんを思うと、「心安うになあ」と奈良のことはでしきりに私たちに言われたことが印象深いが、その意味はむしろ心安らかになあということではなくて、なかよしになあということであろう。ある人がある人と心安い間柄であるといえ、それはその人たち同志が親しい間柄にあることだ。

関西人でない私には正確なところは分からないが、晩年の法主さんが「心安うになあ」と言われる時、私はそのことは響きが大変好きで、いいことばを使われるなあと常々感心していた。

そのことばを私に引き寄せて使わせていただくなら、法主さんは、奇稲田日女命、須佐緒命、あるいは奇玉饒速日命というような古代の霊神と心安うに交わり、もっと時代を下れば聖徳太子とか光明皇后とか日蓮さんの霊と心安うに交わってこられ、その交わりの中で、大倭紫陽花邑という、古代の香りのする明るく静かな霊的な邑をつくってこられた。

どこからどこまでを古代と呼ぶのか、じつはそこが問題なのであるが、奈良の大倭紫陽花邑を訪ねれば、大和朝廷が成立する以前の諸豪族時代以来流れている地霊神の香りが、邑内の樹木や池や道、磐座や人からそこはかとなく感じられるのは

事実であった。つまり、天ツ神ではなくて国ツ神の放つ、明るくしめやかな土着の香りである。

法主さんは、そのように古代霊と交わりながら、いわば古代を現代とし、現代を逆に古代化して生きてこられたのであるが、そのことの含んでいる意味は、見かけよりもずっと深いものがあることを、最近の私は思う。

というのは、歴史というものを、古代、中世、近世、近代、現代と分けて見て行くことはむしろ一つの識見であり常識でもあるが、歴史の遠近法というものをもっと奥深く広げて見るもうひとつの見方があるのもよいのではないかと、私は考えはじめているからである。

御承知のように、東アフリカ・タンザニアのオルドバイ峡谷の周辺で、人類が発生してきたのは二五〇万年前とも三〇〇万年前とも言われている。そうであるからには、人類はすでにそれだけの歴史時間を持っているのであり、人類の本当の古代は二五〇万年ないし三〇〇万年前まで遡るのでなくてはなるまい。

歴史年表によれば、人類の文明が発祥したのは、紀元前四千年から三千年にかけてのいわゆる四大文明、エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、黄河文明ということになっていて、「古代」の原点をそこに置いてそこから歴史が始まる。それ以前は、考古学しかたどることのできない、中石器時代、旧石器時代ということになるから、

歴史を新石器時代から始めることは、先に記したように一つの必然であり、識見でもあることは当然である。しかしながら、その考古学の成果もきちんと正史に取り入れて、太古からの人類史の年表を作り直すことは、できないことではない。

まわりくどい表現をしたが、結論的に言うならば、その新石器時代以後、つまり四大文明発祥以

後の歴史を、一括して近現代と呼ぶことができるのではないかと、そういう歴史観も必要なのではないか、という考えが最近の私の中におこってきているのである。

物理的な時間軸からしても、二五〇万年内の最近六千年は当然近現代であるが、そのことは別に置いて、歴史が人類の意識の集積の歴史であることを軸に置いて考察した場合においても、世界的には四大文明発祥以後、日本史的には縄文時代草創期以後は、近現代であるとする見方が成立する。

それは、法主さんが奇稲田日女命というように、大和朝廷成立以前の霊神と交わって、現代の奈良市に大倭紫陽花邑という古代的な邑を作ったことにひとつの例として見られるように、歴史上のある時点で生じたある意識（例えば奇稲田日女命）が、ここにある私たちの意識に具体的に届いて働きかける時には、その意識（霊と呼んでもよい）はまさしく現代のものであるからである。

縄文草創期の土器を今私が見れば、その土器は縄文草創期のものでありながら、今の私の意識としてここに発揚される。同様に、ブツダの言葉や味わえばブツダはここに現われるし、もっと古いリグ・ヴェーダ讃歌の神々に触れれば、その神々はそれとしてここに現われる。

つまり、歴史が人間の意識の歴史であるからには、意識の特性である非時空性（想像力とも四次元延長性とも呼ぶ）が作用して、五千年や六千年の時間は一挙に近現代と呼ぶことが可能な域に引き込まれるのである。

この五、六千年の人類の歴史を近現代として眺めてどのような利点があるかという、ひとつにはこの先五、六千年の歴史を逆に近未来として眺め得るといえることがある。その視点においては、

百年単位(二〇世紀や二一世紀という)で歴史をとらえるのでは見えてこない、「地球・人類」、あるいは「太陽系・生物」というスケールでの非常におおらかな、惑星生態系にかなった歴史の見方というものが可能になってくる。惑星生態系にかなってさえいけば、過去において二五〇万年生存してきた人類であるから、未来においても最低二五〇万年くらいは生存が可能だろう。それだけの時間であっても、太陽の残された寿命の約五十億年に比べれば、微々たる時間と呼ばなくてはならない。

#### 四

この五、六千年の人類史を近現代史としてとらえる利点は、ほかにもいくつも挙げられるだろうが、もうひとつだけそれを挙げれば、歴史の五、六千年が近現代となることによって歴史のスピードが止まるということがある。

これまでの私たちの歴史は累進的に進歩一辺倒の歴史であったが、この五、六千年をまとめて近現代とすることによって、進歩という価値観に変化がおこり、進歩はむろん悪いものではないが、それはより深い惑星生態系の回帰して止まない系域における一要素であるという見方が成立してくる。私たちの現代文明はおおむねアメリカ文明であるが、このアメリカ文明と例えばエジプト文明を、あるいは古代マヤ文明を、あるいはまた日本の縄文文化を、近現代という同一の歴史時代の枠内で眺めることが可能になる。

私たちが歴史に学ぶのは、歴史上に現出した私たち人類の意識の形態を学ぶのであるが、この五、六千年という時間の幅とこの地球上の各々の地域という地域変化の組み合わせにおいては、この近

現代における文明のモデルは数十倍数百倍の多様に拡大され得る。

法主さんが、奇稲田日女命（いざなひめのみこと）の時代を現代の奈良の地に息づかせ得たのと同様に、ブツダの時代はまだ現代であるし、聖書の時代を現代とすることも可能である。

社会の基盤にコンピュータという不可逆性の技術が置かれた現在、というより技術というひとつの不可逆性から文明を見れば、文明はひたすら進歩する以外になく、また真にそうであってほしいと私も願うが、その進歩は技術の進歩であって、人間性のそれではない。人間性は、百年前も千年前も五千年前も、寿命せいぜい百年という定められた枠の内であって、現在の平和と幸福を願い、未来の平和と幸福を願う存在であるという一点において進歩し得ない。

正確な歴史資料を提出できるわけではないが、技術という概念を獲得した四大文明発祥以来の人類史は、すべて現在及び未来の人類の平和と幸福を願う歴史のバリエーションであったという意味でも、それは近現代史であると思う。

以上のことは、あまりに大まかなデッサンであることは私もよく承知しているつもりであるが、少なくともこれは理屈ではない。

実感として私の場合であれば、ブツダの時代やウパニシャッドの時代、リグ・ヴェーダ讃歌集の時代は近現代であり、そこから私が与えられ、今の社会に伝えたいと思うことは無尽といつてよいほどにある。

法主さんが帰幽されて、法主さんのように古代を伝えてくださる方はなくなつたが、私たちは法主さんでなくとも、誰でも自分の内に古代を持つか秘めているかしている。そうであるとすれば、その古代の豊かな声をよく聞いて、明らかにそれ

を自分へのごとくとして聞きわけけるならば、それがそのまま古代を現代化することであり、現代を古代化することである。それがつまり、歴史に学ぶことであり、歴史を生きたことの意味でもあるだろうと思う。

#### 表紙写真に寄せて

#### 山尾三省の戒名と遺言

手塚 賢至

山尾三省は生前に自らの戒名を名付け、遺言も遺している。「三信院永劫光明帰命居士。死を自覚して余名いくばくかを知る中で自身に名付けた戒名。そして、遺言は死の直前の7月7日付けで発行された、ある機関紙上に『子供達への遺言・妻への遺言』と題した願い(遺言)に示されている。

ここに記された「三つの遺言」は「水」と「核(原発)」と「平和」への澄んだ力の漲るメッセージ。「生まれ故郷の東京・神田川の水を、もう一度飲める水に再生したい、(その時)永劫に未来が戻り、文明が再生の希望をつかんだ時である。」「この世界から原発および同様のエネルギー出力装置をすっきり取り外してほしい(これが)これからの現実的な幸福の第一条件である。」「日本国憲法の第九条をして、世界のすべての国々の憲法第九条に組み込ませ給え。武力と戦争の永久放棄をして、すべての国々のすべての人々の暮らしの基礎となさしめ給え」。生涯の余命の限りに伝えたかった三つの遺言は逝去後23年を経た今日でも、いや、今こそ輝きを失わない詩人渾身の祈りの言葉。いずれも生命とヒトの生活と社会の在り方、さらには地球の未来までも見据えて言葉尽くす。この世、人類が今世紀初頭に築いた文明の現状を顧みれば三つの遺言の指し示す言葉はます

まず切迫して重い。真の詩人は時代の先覚者であるという。ならば三省は単なる詩人の名に収まる人ではなく、過去現在未来の時空に思索をはばかせ、詩人・思想家としての人生の晩年期において集中的に刊行された『アニミズムという希望』『リグ・ヴェーダの知慧―アニミズムの深化のために―』（いずれも野草社刊）をはじめとした数々の著作に時代の先覚者としての高い思想性がくつきりと刻印されている。人と自然にかかわる森羅万象のあらゆるいのちを尊び敬愛し共に生きる思想が新たな時代を開いていく鍵と捉えて、アニミズムという希望を深めて伝えた先覚者に違いない。

〈三信院〉の三信とは心を尽くして信奉したヒンズー教、仏教、そして古来より続く日本列島の自然風土に根差したカミながらの道と諭えられよう。宗教、宗派にこだわりのない。いずれも深く掘り下げていけば同一、同根の魂の源にたどり着く。

表紙写真は三省が書齋とした愚角庵と名付けられた小庵の祭壇。

「三省さんは祈りの人、祈りが大好きな人でした」と妻の春美さんから聞いた。この書齋に入ると執筆の前には必ずこの祭壇の前に座して祈りの時間を過ごして様々な経典から、その日その時々にお経を読むのが習わしだったという。中央には手彫りの阿弥陀如来の木像が凛と立つ。経典の数々、香炉、鐘の類の中でも目に付く団扇太鼓。ヒンズーの神々の像、インドの聖者ラマナ・マハリシ師や藤井日達上人の肖像写真も居並ぶ。そしてアニミズムの坩堝のような様々な自然物が祭壇に置かれ舞めく。貝の種類もホラガイ、シャコガイ、タカラガイなど多彩で美しい。石、岩石への想いも深く、お気に入りの石たちも表情豊かに佇む。

古来貝は人を癒し励ます神具とされ、石は磐座に表象されるように人の祈り祀る対象である。そして、祭壇の背後に架かる布に飾られた紙片に「安宿の餘香」との矢追日聖さんの直筆の書。さらに、そっと添えられた日聖、鈴月さんのツーショット写真。三省の祈りの座には傍らの白川の瀬音さえも絶え間なく交響して、人と自然が共鳴し合う多様性豊かな聖なる場が発露している。〈永劫光明帰命居士〉三省の永劫に光を放つ命はどこに帰っ

第349回大倭会文化行事報告

哀歓の熊野路（続き）

大阪府枚方市 林 修三

《そうした時代にあつてはこの神奈備に祈ることが生活上重要な行事であつた訳だが、現今は僅か古代人の禊場であつたこの地を神社として、細々ながら太古の面影を留めているに過ぎない。この地方に住む人々の中に、彼等の大先祖達が命を掛けて信仰し子孫の繁栄を乞い願つたその真心を肌で感じとる者がどれだけあるであろうか。寒心に堪ない。》(昭和44年10月発行『すさのお』より) という54年前の法主の心配は、今はどのようになっているのか、不安と期待が入り混じった、逸る気持ちを抑えながら月宮神社（現在は日出神社）の境内に辿り着くと、樹齡何百年かとも思える何本もの木立が残る閑静な社の中では、数人の方々が忙しげに動いておられた。邪魔をしてはいけないと思ひながらも思わずその中のお一人に声をかけてみた。

「今日は何かあるのですか？」

「あなた方は？」

「奈良からこの神社を目指してやって来た者達

ていくのだろうか。「三省さんはオリオン星座のあの三星に自分の魂は帰っていくと常々語ってました」と春美さんから聞いた。あの天空に輝くオリオン座の三星を自分の魂の故郷と定めていたのだ。地球という銀河系の一つの星に生まれ出、63年の生涯。三信に学び帰依して広大無辺の宇宙に永劫光明帰命していった。あれから、そして今も果てもない宇宙と意識のかなたできつと矢追日聖さんと心安うに語りあつていく。

令和5年10月1〜2日

です」と申し上げると、  
「今日は2日後にあるお祭りの準備で来ています」と言われ、その後お忙しい中を親切にも境内を案内して、蔵の中のお祭りに使う舟まで見せて我々のために説明してくださいました。



とにかくもこの事で、この土地の子孫の方々の先祖の人々の思いを汲み、後に伝えようとする気持ちの一端に触れることが出来、一安心となつた。それにしては偶然の出会いにしては、このタイム

ング、出来過ぎていた。続いてバスで30分程の、南紀旅行ではおなじみの「とれとれ市場」にて昼食と買い物、各自お土産もタップリと購入し、今回の旅程での最後の目的地、海南市の宇賀部神社へ14時過ぎ到着。

神社の正面に通ずるには細い道しがなく、通常バスが停まれる場所からは徒歩で15分以上はかかるという。バス運転手の鶴羽さんは、乗客である我々を少しでも神社に近づけてやろうとの思いで、巧みな運転技術によって直角に近い曲がり角などを側道に落ちないように通り抜けてくださった。おかげで15分も歩くことなく神社のすぐ側に到着、ありがたいことだった。

この神社は平成10年の11月3日に、杉本さんが岸田さん達数人の方々と共に訪れている。神武天皇近畿侵攻の折、敗れた大倭側の「トベイチツク」から感応するものがあつたそう。女性首長である名草トベはバラバラにされ、その頭を葬つた所という(平成11年『とおやまと』3・7月号参照)。各自思いをこめてご挨拶をした。また令和元年の紀伊半島ぐるっつ一周の文化行事の折、もう一人の女性首長、丹敷トベを慰霊したのである。

また宇賀部神社は、ルパン島からの帰還兵小野田寛郎少尉の産土の社でもあった。あの強くやさしき意志を持ち合わせた小野田さんには、やはり名草トベのDNAが秘められていたのだろうか。様々な歴史を持ったその社の周囲には穏やかで典型的な日本村落の田園風景が広がっていた。

今回お訪ねした場所は、いづれも先祖代々の人々の思いを受け継ぎ守護されている場所でした。形は各々ですが、守られる人と守る人々の長い年月にわたる結晶を見る思いでした。古より連綿と今もそこにある形(塚や神社、御陵等)を訪ね交

流する大倭会文化行事の真髄を感じるこの出来るものでした。とにかくも、紀州、熊野路を辿る

### 大倭出版局デスク 岸野春子の四日間



令和6年2月9日、日聖  
法主の帰幽祭。  
大倭拜殿で「法主帰幽祭」  
が午後2時から始まった。  
3時ごろ参拝者の後方が  
ザワツク、岸野春子さんが

大倭安宿苑の事務所近くで倒れていたとのこと。  
安宿苑の職員さんが心肺の蘇生を試み、かけつけた救急隊員がAEDを使うも、結果は芳しくなく、救急車で病院に運ばれた。病院からの一報は残念なニュースとなった。

病院から静岡県浜松市の春子さんの兄、岸野林次さんに連絡がとられ、取るものも取り敢えず姪にあたる西村友紀さんと二人で新幹線に飛び乗ったとのこと。西大寺駅で二人を迎えた青山法義さんの車で先ずは春子さんのあずけられている病院に行つて身内による死亡確認の後11時半ごろ大倭会館に春子さんと共に入られた。

夜も遅かったので10日の朝から、この後のことを進めていくこととし、集まった人達も自宅へ。私は春子さんが亡くなったとお聞きしてすぐ、法主さんに彼女の事をお聞きした。「イマワ ネットイルジョウウタイ」とのこと。彼女は自分の死の自覚は無かったようだった。

10日明け方、春子さんから「ミナサント アイ サツデキマス」との声を感じた。さすがに岸野春子さんだ。これは顕幽不二・還元帰一を自覚され

今回の哀歓の旅路も全員無事をもってありがたく終了いたしました。

ている人の心だと思う。

朝10時前から大倭会館に何人かの人達が顔を出しはじめ。大倭ではよくお世話になっている公益社の河口さんも来邑。岸野林次さんと姪子さん、青山法義さんと河口さんが中心となって以後のことを話し合われた。

11日夕方6時から大倭会館で前夜祭が行われた。

こんな時私が記録係としてビデオを回すお役目であると自覚しているの、式典最中の聖歌「くにも」と「が聞こえ始めても自分の声はカメラに近すぎるので、声は出しにくい。

聖歌の中ごろ、霊界の誰かかは分からないが、大倭の霊界も「ダイガツショウ」と教えてくれた。12日1時から春子さんの帰幽祭が行われた。

式典中、弔電の代読の後フアックスで送られて来た「メッセージ」の数々、春子さんが如何に心と心のお付き合いをされてきたか、聞いておられた方々も彼女の幅の広さに驚かれたのではないだろうか。式典の終、最後のご挨拶として全員がお花で彼女を飾ってくれました。

出棺の時となり、私はマイクロバスに乗せてもらい、彼女が残っていた編集集中の資料を持参した。「火に」あげるためではありませんぞ。

「とおやまと」2月号を印刷するため、残された編集部員がご遺体の火が消えるまでの2時間を現場で編集会議したのです。

お棺のある火葬炉の大きな扉が閉まる直前、岸野さんの声「ミナサン オサラバ」でした。

(杉本順一)

令和5年5月29日～6月5日  
こもれる魂魄の地を訪ねて(第54回)

## 東北・北海道の旅

杉本 順一

### その4

#### 旭山動物園、北海道イン北海道

6月1日(8時半) ホテルJRIイン旭川出発。  
(9時15分) 旭山動物園到着、(同30分) 開園。

動物園でもたくさん動物が亡くなっているだろうからと、法主さんの奥津城にお供えされていた、小さな黄金糖をお供えしておいた。今は小さく囲われたスペースに子熊も暮らしている。昭和33年頃の北海道では、お土産屋さんの軒先に子犬のように鎖につながれて子熊がおとなしくしていたの思い出した。

動物園と言えば大阪や京都のように平地に広くつくられている動物園しか知らない私だが、旭山動物園はまったく違っていた。大げさだが、二次元と三次元の違いであった。

娘の表現を借りると、

○印象に残ったのは北海道産動物舎

自然の林を大きく区切ったような囲い(バードケージ)の中にオジロワシ、オオワシ、クマタカが展示されており、目線の高さで営巣の様子が観察できる。すぐ近くに止まるオオワシは大迫力で目が合うと怖いくらい。

その後、訪れた先々で野生のタカやワシが舞うのが車窓から見えた。目的の町に入る時、峠を去る時、帰りの空港に向かう時など、姿を見せてくれるそのタイミングが嬉しく、記憶に残っている。

○ほかの動物園とは様子が違うサル山

ニホンザルを飼育しているサル山を見下ろしてしばらく観察していると、今まで見たサル山とは少し様子が違うことに気付く。何も起こらないのだ。サル山のそれぞれの高さの層でグルグル回っているだけ。おもむろに座って毛繕いする程度。動物の生態やそれに伴う能力を自然に誘発させて鑑賞者に見せるように工夫した、「行動展示」がウリの旭山動物園。サル達にストレスがないのか、いざこざが起こらないのだ(唯一、母ザルだけは子ザルを隠して抱き、他のサルから離れて座って、周りを警戒しているように見えた)。

○来園者から人気のもぐもぐタイム  
飼育スタッフがエサやりするところを観察できる人気イベント、もぐもぐタイム。毎日11時頃から15種ほどの動物に順次エサやりが行われる。9時半の入園と同時に、来園者の少ないうちにゆっくり観察……と思っていたのだが、毎日11時にエサをもらえると分かっている動物達はしっかり寝ている時間なのだった。おかげでトラ、ライオン、白熊など猛獣達の穏やかな寝顔が見られた(アザラシまでも水底で寝ている)。事前に色々調べたが、重役出勤は聞いていなかった!

私と言えば、三次元の動物園は疲れました。休憩時間が長かった。修学旅行の高校生がたくさん来ていたので、自然に人間観察していた。  
男女共学らしく7・8人がグループになって園内を回るらしい。「次はライオンのところにー」タイムキーパーの女生徒の声。「ほおー、同じ男女共学でも私達の高校時代とは少し違う感覚だ」と。  
野外にも机と椅子がセットされており、隣の家族が食事をしていると、カラスが同じ机の反対側に止まっている。この家族はまったくカラスを気に

にしていない。カラスも人間を怖がっていない。昔あった私とカラスのこと。

ある朝、邑の鏡池の堤の道を歩いていたら近くで「ボンノ アホ」と声がした。何だ「ボンの阿呆?」周りには誰もいない。もう一度同じ言葉が目の前の松の枝に止まる古びたカラスから聞こえた。「お前か、お前に言われたんじや、しゃあないわ」と声を返した。そのカラスは「わっはっはっははは」と大きな声で笑いながら飛び去った。この経験、永遠の謎です。

(12時30分) 旭山動物園を出発。美瑛<sup>びえい</sup>に向かう。美瑛は北海道中部、上川盆地南端にある町。十勝岳連峰北西麓のなだらかな丘陵の上に、小麦などの畑がひろがること記されているように、北海道らしい眺めを車で回りながら、写真に収める。遠く連峰には雪、足元にはどこまでも続く麦畑、この丘陵地帯の眺めを堪能した。途中レストランビブレ(美瑛のフレンチ)で昼食。

(16時00分頃) 出発。旭川鷹栖ICから高速道央自動車道へ。昨夜は暗闇を孤独のドライブであったが、明るい高速を周りの景色を見ながら走るのはまた趣が違った。旭川から札幌まで140kmほぼ真っ直ぐの道央自動車道。滝川市から札幌まで車で走っても、これだけ遠い。

この距離を汽車と徒歩で移動された十津川村の人々に思いをはせ、また屯田兵(明治期の北海道に配備された、同地の警備と開拓を目的とする土着兵。平時は農耕に従事し、有事の際は軍隊を組織して参戦した)とその家族の人々のご苦労に感謝しつつ新千歳まで戻った。

(18時30分) ホテル グラントラス千歳到着。  
(19時30分) 新千歳空港ポプラ店にレンタカーを返却する。

# あじさい日記

1月7日 午前9時半から西祭庭で大とんど。昨年12月24日の大倭神宮大掃除で切り出された古い竹や年始の神飾り、昨年の祖霊祭に出された経木などを火にあげました。天気が穏やかで炎が高く舞い上がりました。

恒例のぜんざい・大根炊き・フレンチトースト・焼き芋等がふるまわれ参加者一同舌鼓を打ちました。

1月14日 祝会。河岡ほずみさんが(大阪市西成区)初参加、藤本宏秋さんと『ガイアシンプオニー』上映会での仲間とのことです。今年最初の祝会で、じっくり語り合いました。

この日、交流の家でFIWC関係者が鍋料理等で新年会を行いました。

1月15日 大倭神宮月次祭。

1月18日 午前10時半から大倭大本宮拝殿において、大倭殖産(株)の事業関係者グループ「安全衛生協力会」の安全祈願祭が行われました。

1月19日 拝殿のエレベーター点検が行われ、異常なく無事終了しました。拝殿利用者の高齢化などに伴って、このエレベーターの利用者が少しずつ増えています。

1月23日 大倭大本宮月次祭。この日の法話は昭和42年1月

23日月次祭から、令和4年1月号『おおよまと』に「本当日の本精神とは一だらかにしてなごやか」として掲載分でした。

2月2日 午後1時から教務本庁で青山元子・芝香須彌・杉本志津女・山崎波留茂の4名で、玉緒祭のための福豆煎りをしてくれ部屋いっぱい香ばしい匂いがしました。

2月3日 玉緒祭。参拝者一同が、それぞれ福豆を戴いて帰りました。

この日お聞きしたのは、昭和52年2月3日の法主さんを囲んでの座談会から、平成12年3月号『おおよまと』に「玉緒祭の日に節分の由来を聞く」として掲載分でした。

午後6時から大倭会館で大倭町自治会の役員会が開かれました。

2月6日 大倭神宮月次祭。

夜6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では(菅原園)

1月7日 朝から紫陽花邑の大とんどに参加。行った時にはもう火が終わりかけていましたが、火を眺めながら参加された方々に声をかけられて嬉しそうにされ、ぜんざいやフレンチトーストを楽しみました。

2月4日 午後から交流ホールで紙芝居。みんな真剣に見ておられました。

## (須加宮祭)

1月16日 今年初めの書道クラブを行いました。

1月23日 音楽療法。楽器を鳴らしたり、皆で歌を歌ったりしました。

2月3日 節分。職員が鬼に扮し豆まき(新聞を丸めた物)がよく笑いました。

## (長曾根祭)

1月1日(特養)フロアにて正月飾りの彩りの中、職員による落語を披露。また絵馬の絵に願い事を書いて書初めレクリエーションを行いました。

1月11日(デイ)手作りの祝膳で新年会。ビンゴゲームを行い、獅子舞と巫女さんも登場し盛り上がりしました。

## こだまこだま

### ▼栃木県 竹内高明

◆杉本さんへの年賀状より

三年前には父が亡くなり、一昨年にはウクライナ侵攻が始まって、新年のご挨拶を欠かせておりました。我が家は幸いに皆元気で過ごしておりますが、ウクライナのことはいつも気にかかっています。ささやかながら支援を呼びかける催しをしたり、愛知県でのウクライナ難民交流会で通訳をしたりなどしています。邑の皆様によりしくお伝え下さい。年頭から多事多難ですが、どうぞ良いお年となりますよう。

## ▼大和郡山市 小幡陽子

### ◆大倭会御中

#### 計報

小さい頃から自転車

で両親(中村義周・照美)に連れられて大倭によく行きました。法主さんの教えが私たち家族の精神的支えでした。そんな母が、昨年12月24日朝早く帰幽いたしました。肝炎を患いながら、最期まで自宅で過ごし旅立ちましたので報告させていただきます。80歳でした。向こうの世界には法主さんも居られるし、心はつながっていますし安心はしています。有難うございました。今後ともよろしくお願ひいたします。(中村家一同)

### ▼石川県 森 要作

#### ◆ワネス通信より

いろいろ気遣いのご連絡を頂きありがとうございます。NPO法人ワネススクールの金沢校舎、鳥越校舎(白山市)とも関係者皆無事になっています。年末までウインタースクールに参加していた友人の古椿雅道さんの所属する被災地支援NGOが、すでに被災地に入り情報を伝えてくれているので、そこを頼りにご縁のあった方・所から訪ねていきたいと考えています。

◆佐渡市 大滝哲也

#### ◆編集部へのメールから

中越地震の時の震度4でも家全体が揺れて机の下に避難しましたが、今回の震度5強は比べ

物にならなかつたです。あちこちで物が落ちたり倒れたりしました。台所が一番ひどかったです。家屋の損壊はありませんでしたが、こんな揺れは生まれて初めてです。その後、一日に一回以上小さく揺れる日が何日も続きました。始めは小さくても、これからどれだけ大きくなるのかと思うと、そのたびに固まってしまいます。佐渡でさえこうなのですから、死者がかなり出ている能登の人達の恐怖と苦難は計り知れません。佐渡北部の海岸を初めて訪れた時、能登北部の海岸の風景に似てると思いましたが。というのも、40年ほど前に反保利通さんと共にその地を歩いたからです。輪島の朝市にも行きました。お亡くなりになられた方々へのお悔やみを、この場をお借りしまして申し上げます。

# あんない

\*月次祭(大倭神宮)

3月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催祝会

3月10日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\*月次祭(大倭神宮)

3月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大本宮)

3月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。